

中央アルプスに生息するツキノワグマの活動時間

○細川勇記(信州大学院)

泉山茂之・瀧井暁子・高島千尋(信州大学・山岳科学研究所)

1. 背景・目的

ツキノワグマ(*Ursus thibetanus*, 以下, クマ)は, 人里近くに出没し, 農作物被害, 林業被害, 人身被害などといった人との軋轢を生じている. このような被害を防ぐためには, クマの行動を踏まえた上で効果的な防除対策を行う必要があると考えられる. クマは森林や急峻な地形で生息することから, 個体の継続的な行動追跡が困難であった. しかし, 近年GPS 首輪を用いることにより, クマの位置情報だけでなく, 活動量についても多くのデータを得ることが可能となった. Kozakai *et al.* (2008)は, 活動量センサーのデータから, クマの活動・非活動を区分することが可能であると報告している. そこで本研究では, 活動センサーのデータを用いて, 中央アルプスにおいてクマの活動時間がどのように変化するのか調査を行った.

2. 調査方法

調査対象個体は, 2011 年及び 2012 年に長野県内で捕獲された個体(オス 11 頭, メス 12 頭)とした. いずれも活動量センサー付きの GPS 首輪(VECTRONIC Aerospace GmbH GPS PLUS-1D および 2D Collar, ドイツ)を装着し, 放獣した. 個体追跡及びデータのダウンロードは定期的に行った. 取得できたデータの中で, 活動量センサーから得られたデータを使用した. Kozakai *et al.* (2008) に従い, $X+Y<13$ を非活動とし, それ以外を活動と分類した.

クマの月ごとの活動していた比率の変化を明らかにするため, 4~11 月の各月の活動していた比率の平均値を算出した. さらに, 一日の中でクマが活動する時間帯を知るために, 活動量センサーで得られたデータを日中・夜間・薄明薄暮に分類し, 活動に分類された時間帯の比率を求めた.

3. 結果・考察

月ごとの活動比率については, 4 月から徐々に割合が増加し 10 月に最大となった(図 1). このことから, 秋期に向かうにつれ月ごとの活動比率が増加していることが明らかになった. これはクマが冬眠後の春期から秋期にかけて活動が活発になり, その後再び冬眠に入る, という活動サイクルを表しているものと考えられる. 秋期に活動比率が最大になる理由については, 秋期(9 月中旬以降)にクマが冬眠に向けて堅果類を飽食することが関係すると考えられる. また, クマが活動する時間帯は夏期に個体差が見られた. 2012 年に, 農作物へ被害を及ぼしていた 4 個体(オス 2 頭, メス 2 頭)はすべて同じ傾向を示したことから, 夏期における活動時間は農作物への課外の有無が大きくかかわっていると考えられる.

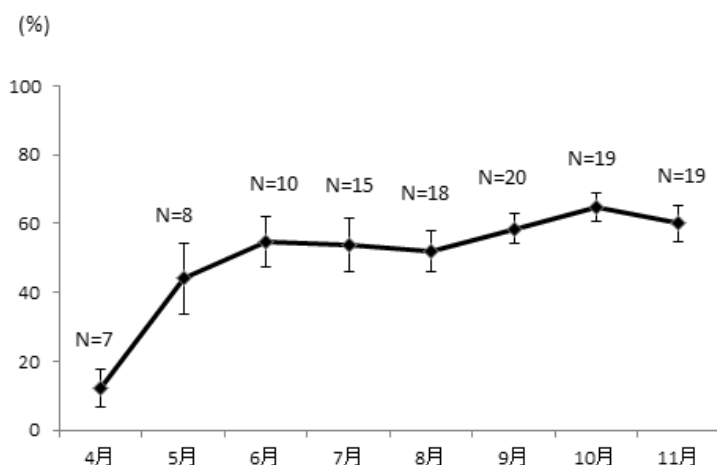


図1